

因幡国における中世の城郭と

城郭下集落の歴史地理学的考察

中 林 保

はじめに

領主達の生活、戦闘、支配の拠点である城郭を、生活面を中心に考察したものに、籠瀬良明氏、小林健太郎氏の研究がある⁽¹⁾⁽²⁾。そこで、これら先学諸氏に学び、因幡国における中世の城郭と生産地域との関係を考察する。そして、更に、それら中世の城郭下に成立した城郭下集落（城下町）、四つを選び、その復原を試みる。

なお、城郭の分布、分類は『因幡志』⁽³⁾と、『日本城郭全集』⁽⁴⁾によった。また、城下町の復原は検地帖や、当時の古絵図、古地図などを基に復原すべきであるが、因幡国にはそのような中世の資料は残存していない。そこで、地籍図の小字名を中心に、江戸時代の『稻場民談記』⁽⁵⁾、『因幡志』、更に、現在の地方史誌や、地方史家による文献、そして、実地調査による城下町時代の遺構、聞き取り調査により復原を試みた。しかし、不十分な点多く、今後、更に多くの検討を要する。

1 因幡の地形的概観

東は但馬、南は播磨、美作、西は伯耆に接し、北は日本海に臨んでいる。国の南部には中国山地が東西に走行し、この山地を水源とする諸河川は、分水嶺が北に偏しているため、短かく急で、小河谷平野を形成している。この国を地形的に区分すれば、千代川上中流の八頭山地地域、下流の鳥取平野地域、そして、岩美小河谷地域、気高小河谷地域の四地域に大別される。八頭山地地域は千代川の上中流で、智頭川、八東川、私都川などの流域に発達する谷底平野からなり、智頭川、八東川両河川の合流点付近には三段の段丘が発達している。鳥取平野地域は千代川などの作った沖積平野で、後氷期の海侵期には溺れ谷となり、湾中に今木山、天神山、青島などの島嶼群が浮んでいた。やがて、湾奥から流れる千代川、袋川、野坂川などの諸河川などの流勢と日本海沿岸を流れる沿岸流との作用により、湾頭に沿岸州、砂丘が形成され湾頭付近をふさいだ⁶⁾。湾頭付近がふさがれると波や潮流の作用の少ない内湾となり、そのような内湾に千代川、袋川、野坂川などが上流から土砂を運び埋積作用をくり返した。埋積作用が進むと内湾は急速にデルタ化した。しかし、湾西部には長柄川などの小河川しかなく埋積作用弱く埋め残し湖山地が形成された。岩美小河谷地域は蒲生川を中央に、その東に陸上川、西に小田川の小河川が並行して北流し、上中流には小谷底平野を形成し、下流域には小沖積平野を形成している。また、海岸には砂丘が発達し、沖積平野末端の砂丘内側には江戸時代の頃まで沼沢が存在していた⁷⁾。

気高小河谷地域は河内川の作った諸谷と、日置・勝部川の河谷からなっている。河内川は断層線にそって発達したものと推定され、逢坂、勝谷両河谷の谷頭を截頭し、空谷が形成されている。これら空谷には三段の段丘がみられ

る。また、これらの河谷の下流域には、もとの溺れ谷を埋めて沖積平野が形成され、河口付近には砂丘が発達し、砂丘内側には沼沢の存在がみられる。日置・勝部川の流域にも谷底平野が発達し、河口付近に砂丘が形成されている。

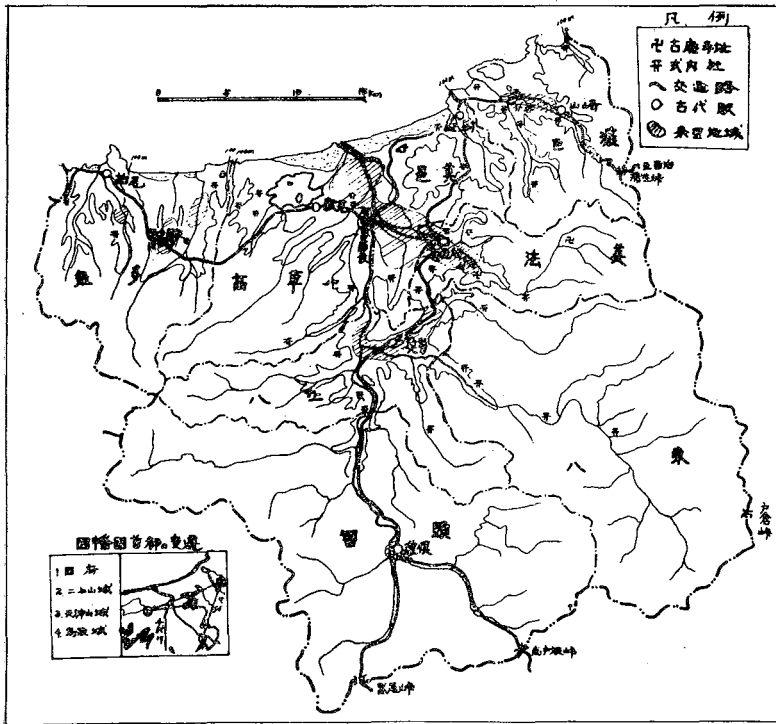
2 古代の因幡

『和名抄』による古代因幡国の国府は法美郡で、現在の国府町庁付近におかれた。この国は巨濃、法美、邑美、八上、智頭、高草、気多の七郡五十郷で構成されていた。当時の生産活動の中心地域を条里施行地域と想定し、因幡国内における条里施行の推定される地域を考察すれば、八頭山地域では八東川、私都川、智頭川の合流点付近と、智頭川流域の『日本後紀』⁽⁸⁾の「道俣駅」址に比定されている⁽⁹⁾。智頭町智頭付近にみられる⁽¹⁰⁾。鳥取平野の千代川左岸の高草郡には『東大寺文書』の「因幡国高草郡高庭庄」⁽¹¹⁾により、北は八条から南は二条にわたる条里が施行されていたことが推定される。また、千代川右岸の国府の置かれた法美・邑美郡の平野にも条里遺構がみられる。岩美小河谷地域では古代山陰道に浴う蒲生川の中流域にみられ、小田川流域にはみられない。また、気高小河谷地域には河内川、勝谷、逢坂の諸谷の谷頭の接合点付近の、当時の気多郡家の所在地⁽¹²⁾付近を中心に条里遺構がみられる。その他、日置川の中流域にもその遺構が推定される(第1図参照)。

3 中世の因幡

(1) 城郭の分布

城は戦闘を中心とする軍事的機能を有し、比較的短期的な性格を有するので山頂、山上に多いが、館は平素の居住



第1図 推定古代因幡国の条里地域と交通路図

地、支配の中心であり長期的性格を有するので村内や平地に多いとされる⁽¹³⁾が、因幡には城と館を分類できる資料はない。そこで、『因幡志』や、『日本城郭全集11』によって、城郭の立地する地形、そして時代別に分類した(第1表参照)。城郭全体二一〇の六二・四の一三二が山頂、山上に立地し、平地とか村内は全体の四・八の一〇にすぎず、『因幡志』や『日本城郭全集11』に記載されている因幡の城郭のほとんどは城であり、館は少ない。中世の城郭は原則として、所謂、「所堅固の城」の時代で、純戦闘用に構築され、館などを中心にした集落は城郭とかなり離れた地域に設けられ、城と集落とは一心同体になっていない⁽¹⁴⁾。従って、山頂、山上に城郭が存在するこ

第1表 因幡における中世の城郭の分布

()内は%

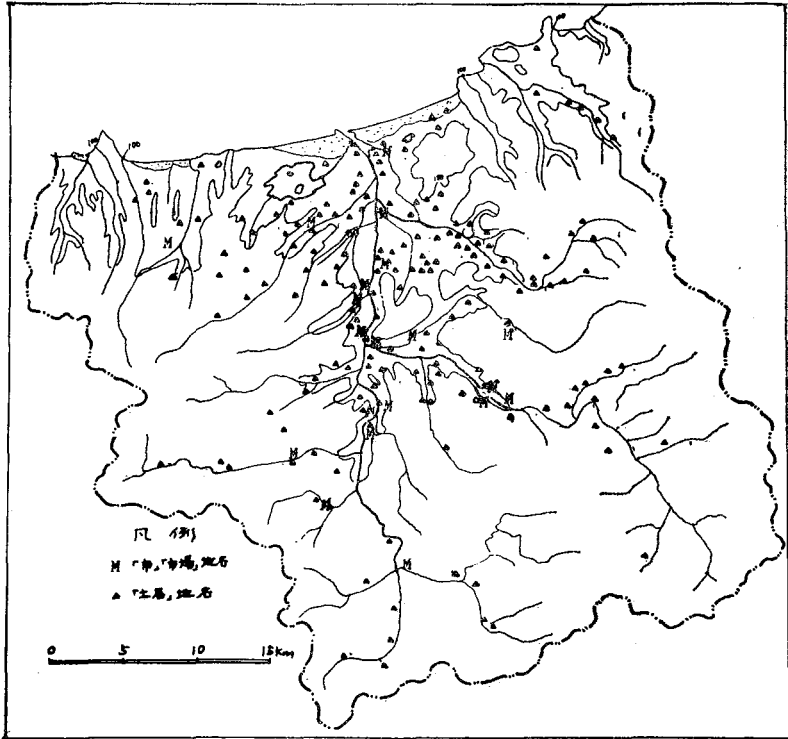
位置	時代		室 町	室町後期 ～戦国	安土桃山	不 明	計
	鎌倉以前	南北朝					
山上 (頂)	2	21	8	33	20	47	131 (62.4)
山 麓	1	1		2			4 (6.9)
村 内							0
社 寺 内					1	1	2 (1.0)
平地(田畑)		2	1	4	1	2	10 (4.8)
山 中				6	3	2	20 (9.5)
不 明			2	4	5	11	48 (20.5)
計	3 (1.4)	24 (11.4)	11 (5.2)	49 (23.3)	30 (14.3)	93 (44.3)	210 (100)

(註) 築城時代不詳のものは、その城郭が歴史上に表れた時代に分類した。

とは平地や村内にも、当然、館に類したものを中心に集落が立地していたのであろう。なぜならば、城郭主は武士であるとともに地主であり、生産地域より離れては存在しないからである(15)。だが、因幡においては資料が乏しいのでこの点に関しては不詳である。

(2) 鎌倉時代

鎌倉時代の因幡国には、服部荘、巨濃別宮、滝房荘、土師荘、岩井荘、葉師寺荘、高狩別府、小別府、紙木別府など多数の荘園がみられ(16)、その分布を条里遺構の分布と対比すると、山間地域にまで分布しているものがあり、生産地域の拡大が推定される。このような荘園増加は、この時代、国衙の勢力がだんだん弱まり、これら荘園を背景とする新豪族が抬頭してきたものと推定され、それらの豪族に、土師氏(八上郡)、敷美氏、長田氏(高草郡)、志加奴氏(気多郡)(17)、佐治氏(佐治郷地頭)、平宗泰(船岡郷地頭)(18)などの名がみられる。この鎌倉時代の城郭と推定されるものは全体の一四%で僅か三と非常に少なく、この時代は城郭未発達時代とい



第2図 因幡における「土居」と「市」の分布図

えないこともない。しかし、この時代は全国的にみれば豪族の割拠していた時代で、それら豪族は村内や平地に自己の居館を構え、それを核として、その周辺に隷属的な小作人を住まわせた集落、所謂、「豪族屋敷村」を形成していたものと推定される。これら豪族屋敷村について『地名語源辞典』は「鎌倉時代の土豪、武士の屋敷は土塁や堀でかこまれており、その一廓を土居とか堀の内とかいった……(19)」とし、豪族屋敷村には「土居」地名が付くものもあるとしている。そこで、因幡国における「土居」地名の分布をみると、鳥取平野を中心とする平野地域に多く分布し、ほとんど集落毎にみられる。このことは、地域の生産力と相関し、また、当時の生産活動の範囲を

示しているともいえない。しかし、これら「土居」地名は中世起源のものばかりとはいえない。ただし、それを分類することは不可能である。

(3) 南北朝時代

南北朝期前には隣国伯耆の豪族名和氏らの活躍で建武中興となったが長く続かず、南北朝時代となった。因幡においても足利氏一門や、その重臣がつぎつぎと守護となつて入国した。また、諏方部扶重（玉津保地頭）、矢部氏（八東、若桜）、波多野氏、小治田氏、青木氏（八東郡）などの諸豪族が足利方に味方した。そして、正平十八年（一三六三）足利方の山名時氏が因幡の守護となった。時氏は因幡だけでなく、伯耆、丹波、美作、丹後と山陰道を中心とする広大な所領をもち、三男氏冬に因幡の守護職を与えていた。その後、八男氏重が守護職をつぎ山名一族の政治は続くが、明徳の乱（一三九一）に山名氏は破れたが、因幡の守護職は山名氏家に与えられた。この頃の因幡の守護所は二上山城（現、岩美町岩常）におかれていたといわれる。

この時代の城郭は全体の一一・四％の二四で、そのうち二一は山頂、山上に立地している。主な分布地域は八東郡の波多野氏、矢部氏関係のものと、巨濃郡の山名氏関係、そして、智頭郡の南北朝争乱に関係しているもので、鳥取平野にはほとんどみられず、いずれも、条里が推定される地域以外を中心として分布している。このことは、この時代はまだ国衙の力が強かったためとも推定される。

(4) 室町時代

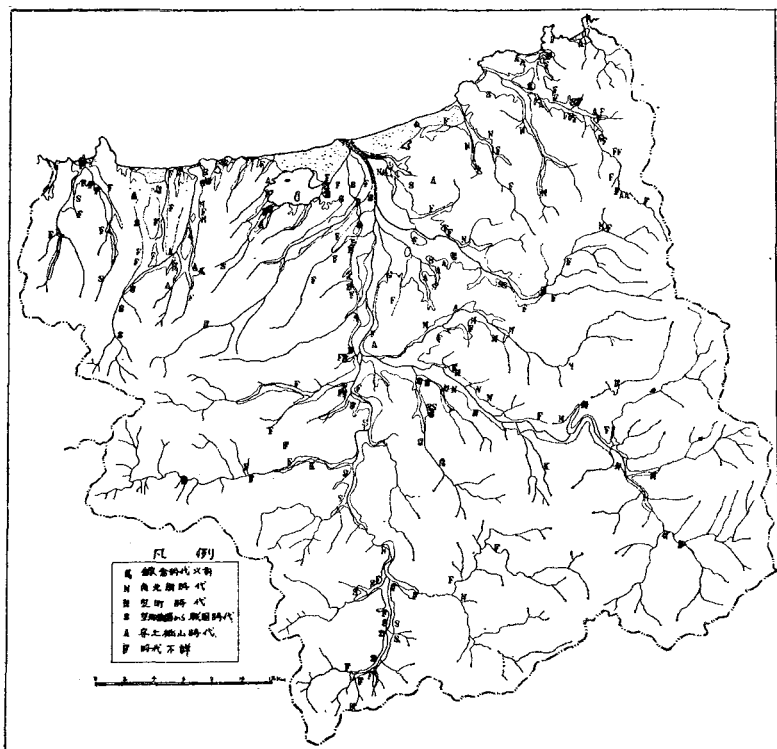
明徳の乱（一三九一）により因幡国における山名氏の所領の半分は没収され、但馬山名氏や、幕府御家人の斎藤、毛利、丹比、進士、朝日、一色、三上、安東、飯尾、吉見氏などの国人層に分配された²⁰。しかし、室町時代の因

幡はおおむね山名氏の管轄下にあり、守護所も嘉吉の乱（一四四一）のうち、二上山城から鳥取平野西城で湖山池東岸の布勢天神山城（現、鳥取市湖山・布施）に移された。

この時代の城郭は十一で、全体の五・二％にすぎず、その大部分は前記、国人層関係のものとして推定され、その主な分布をみると、因幡一円に分布している。鳥取平野は守護山名氏関係、八頭山地地域の私都谷に毛利氏、八東谷に丹比、吉見氏、そして、気高小河谷地域に斎藤氏関係のもの分布がみられる。このことは、南北朝期までみられた国衙の力は、この時代になると衰退していったものとも推定される。

(5) 室町後期～戦国時代

細川対山名の抗争が表面化し、遂に、応仁の乱（一四六七～七七）が起り、両氏は東西にわかれて戦った。因幡では山名勝豊が国侍を率いて出陣した。国侍で応仁の乱に参加したものは、伊達、波多野、矢部、山口の各氏といわれる^(註)。この応仁の乱以降、所謂、戦国の世となり、大名分国の一円知行が促進されるのであるが、因幡では山名氏の力が弱く、また、国侍の力も微力であった。このような時、出雲の尼子経久は大永四年（一五二四）五月大軍を率いて伯耆を制圧、天文十三年（一五五四）因幡に侵入した。しかし、尼子氏も永禄九年（一五六六）周防の毛利氏の進出により屈服した。このような状勢のなかで、山名氏の重臣武田高信が反乱をおこし、岩井、邑美、法美、八上、八東郡を勢力下においた。但馬山名氏が救援にかけつけたが、その勢力は気多、高草郡の一部におよんだにすぎなかった。尚、智頭郡は美作の草刈氏の勢力下にあった。天正元年（一五七三）織田信長の支援で但馬より侵入した尼子の旧臣山中鹿之助は反毛利の因幡山名と連合し、毛利方の武田高信を破り、山名氏を鳥取城に入城（天正元年、一五七三）させた。鳥取城の山名氏はその後、信長から離れ、毛利と手を結んだ。



第3図 因幡国における中世城郭の分布図

この時代の城郭は全体の二三・三〇の四九にも達する。鳥取平野は山名氏関係武田高信関係のものが中心である。八頭山地地域の智頭郡は木原氏関係、八上郡は毛利氏、伊田氏関係、八東郡に矢部氏関係、そして、気多郡もかなりの分布がみられる。また、時代の不詳な城郭の大部分もこの時期のものと推定され、それらを併せ考察すれば、その分布地域は、現在の生産地域とほとんど同じ範囲に分布している。

また、この時期は全国的に商業活動、所謂、「市」の発達をみた時期である。因幡国においては「市」の存在を立証する資料はみられないが、地籍図の「市」、「市場」地名よりその分布をみると、千代川と、その支流の流域を中心に分布が

みられ、城郭所在地や、河川の合流点付近など交通の要衝地に、そのほとんどが分布している(第2図参照)。

(6) 安土桃山時代

天正五年(一五七七)信長は秀吉に命じ中国征服に当らせた。秀吉は天正八年(一五八〇)但馬から因幡に入り、若桜、用瀬、鹿野、浦富の城を陥れ、鳥取城の山名豊国を降し、ひとまずひき返した。その後、山名の長臣らは吉川元春に援を求め、天正九年(一五八一)吉川経家が鳥取城に入城した。この年、播磨より因幡に入った秀吉は鳥取城を落し、因幡を平定した。そして、浦富桐山城に垣屋氏をおき巨濃郡を、鳥取城に宮部善祥坊をおき邑美、高草、八上、法美郡を、若桜鬼ヶ城に木下重賢、用瀬景石城に磯部兵大輔をおき智頭、八東郡を、鹿野城に亀井茲矩をおき気多郡を支配させた。慶長五年(一六〇〇)関ヶ原以降、因幡は鳥取に池田長吉(巨濃、邑美、八上、法美)、若桜に山崎家盛(智頭、八東)、鹿野に亀井茲矩(気多、高草)が配され、元和元年(一六一五)の「一国一城令」により、元和三年(一六一七)姫路より池田光政が因幡の領主となった。

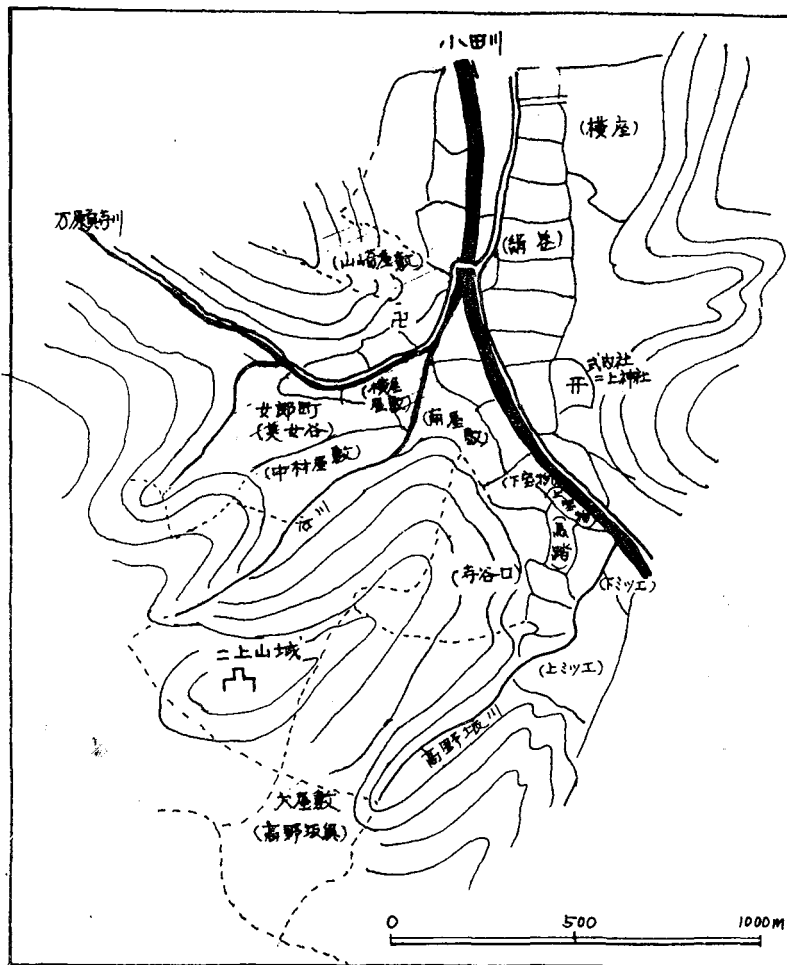
この時代の城郭は全体の一四・三%の三〇に達するが、そのうちのほとんどは秀吉が鳥取城をはじめとする各城郭の「攻め城」であり、これに対する毛利勢の防禦のための「出城」が中心で、その分布は鳥取平野を中心とする海岸部に大多数がみられる。

4 城郭下集落

古代因幡の首都は千代川の支流、袋川流域で、現在の国府町庁付近に置かれた。この千代川下流域の鳥取平野は当時、因幡最大の生産地域であった。中世になると、守護山名時氏は守護所を巨濃郡の二上山城(現、岩美町岩常)に

設けた。それは興国元年（一三四〇）とも、文和年間（一三五二～五五）ともいわれる。それから約一二〇年後の文正元年（一四六六）までの因幡の政治の中心は国の東端に置かれていた。時氏が生産活動の中心である鳥取平野を離れて、巨濃郡の小田川流域に守護所を設けた理由として、三つの理由が考えられる。即ち、鎌倉から南北朝期にかけての因幡国の鳥取平野においては国衙の力が強かったため、鳥取平野以外の地に守護所を選定する必要があった。

都や山名氏一族との連絡上、よりそれらの地域に近い交通上の便のよい巨濃郡を選んだ。また、『続日本紀』に「因幡国猷銅鉞」²²とみられ、江戸時代の『因幡志』によっても銅、金、銀の鉞山が巨濃郡にみられることなどより、中世においても何かの地下資源が採掘されていたものと推定される。この点について『岩美町誌』は「室町時代因幡国の守護であった山名氏は諸大名の中でなかなか勢力をもち……そのかげに山名のふところをうるおす財源が山名の居城岩常でも、しかも二上山城の山つづきの裏山に秘められ、この時代にこの山の金が盛んに発掘せられたと、里人の間に云い伝えられている……」とみられる。以上のような三つの理由が推定される。だが、文正元年（一四六六）以降、因幡の首都は再び、生産活動の中心である鳥取平野に戻った。その位置は湖山池東岸の布勢天神山城（現、鳥取市布施）で、地形的に低平な沖積平野の孤山であるため、湖山池の水を引いて濠とし、防禦を固めた。しかし、戦乱の世になるにしたがい、「所堅固の城」とはならず、天正元年（一五七三）、山名豊国は鳥取平野東端の峻険な久松山（二六四米）上の鳥取城を居城と定めた。これ以降、鳥取は政治の中心となった（第1図参照）。そこで、中世における因幡の政治的中心地であった、二上山城と布勢天神山城、更に、中世から元和の「一国一城令」まで栄え、それ以降、城下町にも、陣屋町にもならなかった若桜、鹿野の城郭下の集落（城下町）の考察を行なってみる。



第4図 推定岩常城下町

(1) 岩 常

二上山城下の集落が岩常である。二上山城は二上山（三三四米）の山頂で、但馬口に面した重要拠点に築城され、『因幡志』に「城西表ニシテ本丸ヲ始メ段々ノ曲輪乾堀馬場ノ迹ナラン……城址ニ上レハ巨濃法美ノ郡中及ヒ海上ニ至ルマテ直下ニ見ル尤トモ高山其構エノ広大ナル國中無雙ノ普請ナリ……」⁽²⁴⁾とみられるように峻険な山頂に築城され、中世独特の「所堅固の城」である。城郭下集落の岩常は、はるか北麓の小田川の支流で、万願寺川と谷川の流域に立地し、城郭と集落とはかなりの垂直的距離がみられる。

給人団の居住地域、所謂、「侍屋敷」についてみると、二上山の南、海拔二五〇～二七〇m位で、小田川の支流、高野坂川上流の小字名「高野坂奥」に通称「大屋敷」とよばれるところがある。この地域は『因伯古城跡』⁽²⁵⁾によると「長五十間斗、横十八間ヨリ十五間位マテ」と記され、面積にすると七五〇×九〇〇坪位となる。里人の口碑によると、この地域が侍屋敷とされる。しかし、この「大屋敷」と呼ばれる地域は地形的にみて、山上に近く、飲料水など不便な点多く、常住の居住地としては立地条件が悪い。また、当時の武士は在地の村落に居住しているのが普通である。このようなことより、この地域は給人団の居住地域ではなく、城郭の一部が構築されていたものと推定される。また、高野坂川と小田川の合流点付近の小字名「上ミツエ」、「ミツエ下」は当時の馬場とされる。

町屋にあたる城郭下集落は、二上山の北麓の小田川の支流、万願寺川、谷川の流域に立地している。ここに発達した当時の集落について『因幡志』は「二上ニ在城ノ時一國都城ノ下ニテ民屋数千軒棟ヲ双ヘ寺院モ多ク繁昌ノ地ナリシトカヤ、今モ谷々ニ其迹アリ長者屋舗、侍屋敷、市肆ノ跡等アリ田圃ノ字ニ茶屋谷、美女谷、土堀、馬場、絹幕ナトイヘルモ皆城下ノ時ノ名ヲ伝ヘタル也……」⁽²⁶⁾と記している。地籍図によると、「中村屋敷」、「横井屋敷」、「南屋

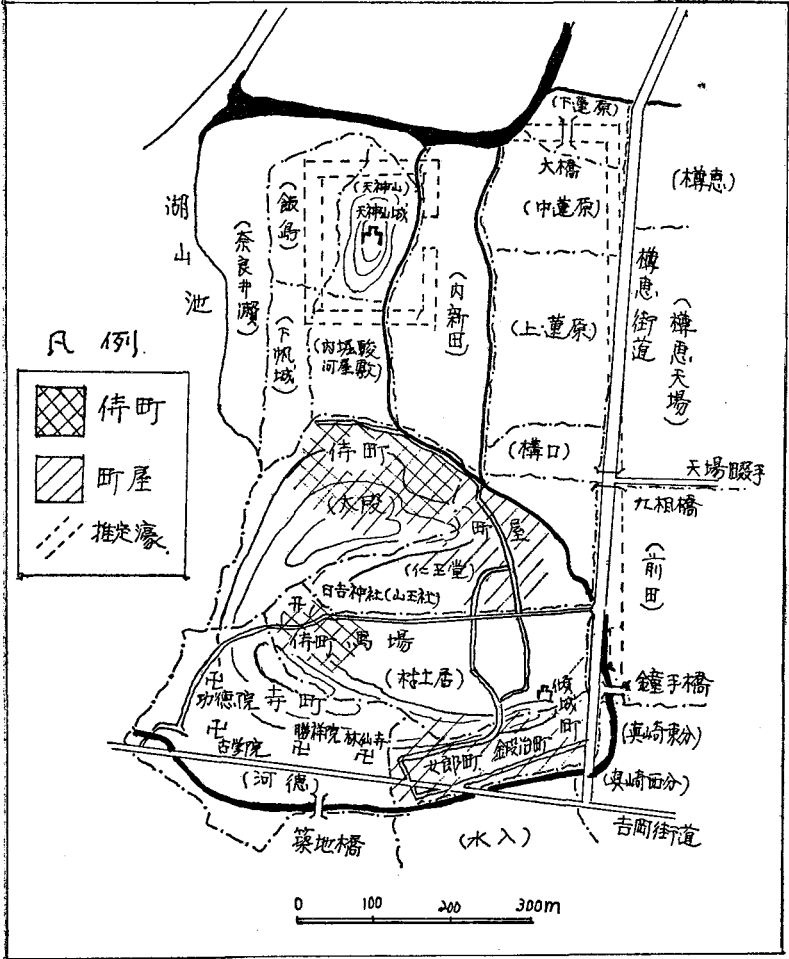
敷、「山崎屋敷」、「美女谷」の地名がみられるのみである。「美女谷」は女郎町であったといわれるが、近世城下町の町屋にみられる町名はみられない。これらのことより、現在の岩常集落付近には政治・経済的機能を有した集落が立地していたものと推定されるが、詳細は不詳である。

城郭下の集落の寺院配置についてみると、現在は、小字名「林ノ下」に「安岳山常智院」がみられるだけであるが、この寺は守護山名氏が菩提寺として建立した寺で、往昔は大我山満願寺と号した……天正年間（一五七三〜九一）に兵火があり、堂宇は残らず焼失したため記録も残らず、その寺跡さえ明瞭でないが、現在、満願寺谷の大奥にある向山集落の旧跡がその跡でないかと思われる。棟札によると、慶長二年（一五九七）今日の号に改め、明治になって現在の地に移転した⁽²⁷⁾といわれる。このとおりとすれば、当時の満願寺は岩常から三軒西北の谷に位置したことになる。また、二上山東麓の小字名「寺谷口」にも寺院があったといわれるが不詳である。このように、近世城下町にみられる防禦のための寺院配置は全くみられない。

以上のように守護大名の城郭下集落、岩常は近世城下町にみられるような侍町、町屋、寺院などの計画的配置は全くみられず、ただ、城郭下に政治・経済的機能を有する集落が混在して立地していたものと推定される。従って、城下町ではなく、城下町的な集落が立地していたものと推定される。

(2) 布 勢

布勢天神山城が築城されたのは室町時代の文正元年（一四四六）、因幡の守護山名勝豊によった。天神山城は鳥取平野の西端、湖山池の東岸で、布勢の卯山のすぐ北の小山で、海拔二五米、南北約一七〇米、東西約一〇〇米の孤山にあった。この天神山城は『稻場民談記』⁽²⁸⁾所収の「布施天神山城図」によると、内堀と外堀で取り囲まれ、内堀は



第5図 推定布勢城下町図

南北の延長約四〇〇米、東西の延長約三〇〇米で内堀内の面積は天神山を含めて約一二ヘクタールと推定されており(29)、地籍図の小字名「内堀駿河屋敷」などにより、内堀の存在が推定される。外堀は『因幡志』によると「倉見村ノ山端ヨリ堀ヲホリテ湖山古川ノ池口へ引廻シテ惣構トシ橋ヲ四ヶ処ニ掛タルナリ、大手口天満驥ノ橋ヲ九相橋ト号ス、天満驥手ハ天神山ノ正面東口ノ海道ニテ徳吉ノ方へ十八町正直ニ通りタルヲ去リ、湖山口ニカカルヲ大橋ト云ヒ深谷ノ方ノ橋ヲ鐘ノ手橋トイフ築地ノ橋ト号スルハ蔵見村ノ前ニアルトソ……」(30)とみられ、外堀は卯山をも内包する広大なもので、布施卯山の南側より、現在の樽恵街道に沿って北走し湖山池に通じていたものと推定され、その一部は川幅約一・五米の農業用水路として残り、更に、大手に掛けられた「九相橋」の名は、現在でも、水路にかかると橋の名として残り、「クソウバシ」と呼ばれている。布勢天神山城の城郭下集落(城下町)は、東に口を開いた円弧状の丘陵の卯山(約四〇米)山麓一帯に立地していたものと推定され、『因幡志』は「堀ヨリ内ハ皆町小路ニテ山王ノ山ノ段々ハ侍屋舗ノ迹ト見エタリ、南ノ尾ヲ正木カ鼻ト号スルハ長臣正木大膳カ構ノ跡ト云リ、西ノ尾ニ朝日某出張ス、其外森下出羽守等ノ構ノ跡皆山王ノ境内ニアリ、麓ニハ仙林寺、功德院、古学院、勝祥院ナトイヘル仏閣葺ヲ並ヘタリト……寺町、鍛冶町、傾世町、上藤小路、経水池ナト云城下町モ皆田圃ノ字トノミ残りテ……」(31)と記している。

城下町における給人居住地域は主として二地域に分かれ、高級給人の居住地域は山王社(日吉神社)周辺があてられ、一般給人の居住地域は卯山の北西山裾で、小字名「大段」一帯に立地していたものと推定され、現在では大部分が畑地となっている。数段の階段状の畑地は当時の給人屋敷跡を想定させる。このほか、『因幡志』にもみられたように、設備を固めるためか、重臣の居館を惣構である外堀内の要点に配していたことが、小字名「真崎二分」の正木

大膳の居館位置などより推定される。町屋地区は丘陵南裾の小字名「真崎西分」と、東裾の小字名「仁王堂」を中心に立地していた。「真崎西分」には女郎町、鍛冶町、傾城町などが立地していたと伝承されている。

近世城下町で防衛上重要な役割をもって配置された寺院配置を考察すると、小字名「河徳」が寺町とされ、「布勢天神山城図」に功德院、古学院がみられるほか、惣構え南側に仙林寺、勝祥院などの寺院が配置されていたものと推定される。このように惣構え南側に多くの寺院を配置したのは、当時、山陰幹道が城下町の南を東西に走行していたものと推定され、この交通路に面する地域の防備を固めるためであり、小字名「真崎西分」の正木ヶ鼻にとりてが設けられたり、すべての出城（砦）が天神山城より東の地域に配置されていることからみて、但馬山名を意識してこのとも推定される。このように布勢天神山城下町は外堀を惣構えとし、その中に立地し、給人屋敷、町屋、寺院配置など近世城下町ほどではないが、かなり計画的に配置されている。このような計画的配置は、天神山城築城当時からでなく、時代の推移とともに、徐々に整備されたものとも推定される。しかし、給人居住地域と町屋などの明瞭な境界もなく、両者は混在的に立地していたものと推定され、家屋も分散的であったものと推定される。

(3) 若 桜

若桜鬼ヶ城の草創は『矢部氏系図』によると「因幡国山田村（今若桜ト改ル）鬼ヶ城開闢矢部十良暉種ハ駿河住矢部彦五良ノ一族也、梶原景時謀叛シ鎌倉ヲ落チ上洛スル途中於駿河彼ノ一族ヲ不残討留メタル勦功ニ依ツテ……故テ因幡八束（今八束ト改ム）ノ東、山田ノ庄ノ辺リ山中二十ヶ村ヲ宛行セラル、乃チ山田ノ山上ニ居城ヲ開築シ……」⁽²³⁾とみられることより、鎌倉時代矢部氏により築城されたものと推定される。その後、天正三年（一五七五）尼子勝久らに攻略され、草刈景継、吉川元春、青木氏らを経て、天正六年（一五七八）、秀吉の臣、木下備中守が八束、智頭

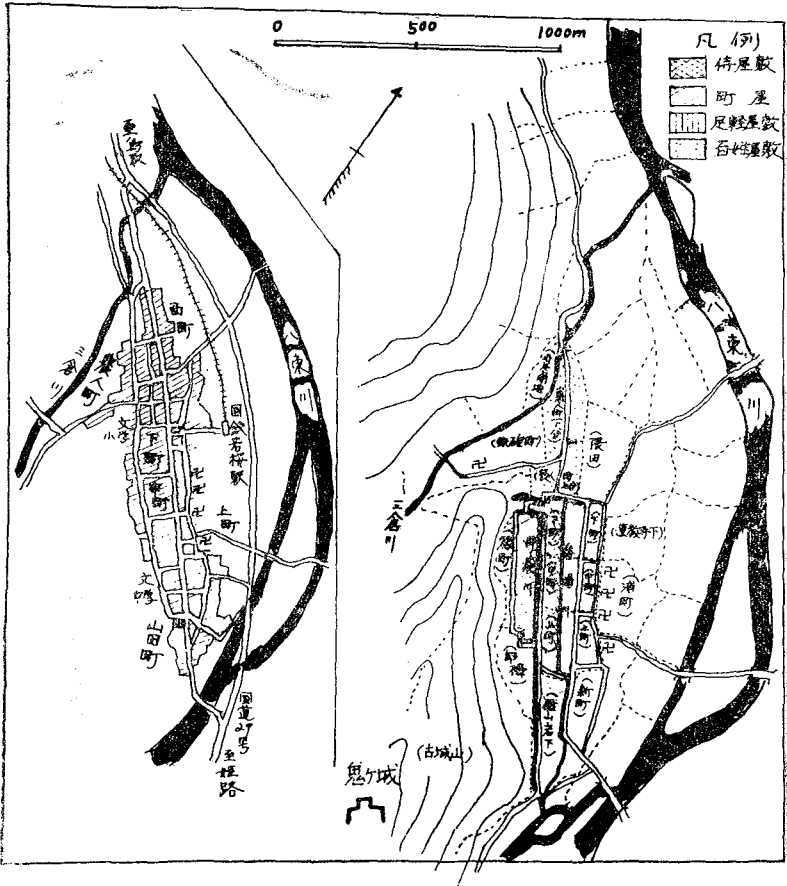
郡二万石の居城となった。しかし、慶長五年（一六〇〇）、関ヶ原戦以降、山崎左馬允が八東、智頭二郡と但馬の一部、二万五千石の居城となったが、元和三年、備中成羽に転封になり、それ以降廢城となった。

若桜鬼ヶ城のある山を鶴尾山といい、城は本丸、二ノ丸、小城、馬場、三ノ丸の五曲輪で構成されていた。城の大手は『稻場民談記』所収の「若桜鬼ヶ城図」³⁸に城郭下東山麓に「大手」の文字がみられる。また、『因幡志』にも「……城ノ東ヲ大手トスル……」³⁴とみられる。しかし矢部氏時代は三倉谷側の小字名「城ノ谷」が大手で、木下、山崎氏時代になって東を大手としたともいわれる³⁵。

城下町は関ヶ原の役を境に急速に発達した³⁶といわれるところから、若桜の城下町も、鎌倉期から戦国期にかけての矢部氏時代には城下町らしいものはほとんど発達せず、安土桃山期の木下氏時代に城下町の基礎が出来、関ヶ原戦以降の山崎氏時代に本格的に整備されたものと推定される。若桜の城下町は八東川と三倉川に挟まれた山裾で、八東川の中段段丘面上に立地し、八東川と三倉川を惣構えに利用している。また、八東川の水を城下町の上流で引き、濠や城下町の各家の飲料水、日常生活水として利用している。

濠には内堀と外堀があり、内堀の位置は現在の若桜中学校の校門付近で、高さ二間余の石崖が御茶川に並行して、道路より内側三間位のところに発見されている³⁷ことより、現在の御茶川に沿って掘られていたものと推定される。一方、外堀は現在の若桜小学校付近で高さ三米余、東北から西南へ約五米の間隔を置いて、二条の石垣が並行して走っていた³⁸ことや、天保十四年（一八四三）の「八東郡若桜宿田畑地続全図」³⁹に、現在の若桜小学校付近の山麓に堀の跡らしいものがみられることなどより、現在の番場川に沿って掘られていたものと推定される。

侍町は外堀より内の郭内で、地籍図の小字名「殿町」、「猿岩下」、そして、番場川（外堀）より内の「上町」、「中



第6図 推定若桜城下町図と現在図(左)

町、下町に配置されていた。この侍町には二条の道路が走っており、一条は内堀（現在の御茶川筋）の外側で幅員約一間～一間半位で、他の一条は、内堀内の山裾側に並行して走り、幅員約二間半位と推定される(40)。一般に、高禄の侍の住む地区では屋敷の規模に相応して広い路幅がとられるところから、内堀内は高級武士の居住地域となり、外堀と内堀の間は一般武士の居住地域になっていたものと推定される。また、三倉川近くの小字名「鉄砲町」

は、下級の足輕組の屋敷地域と推定され、足輕組屋敷地域は一般武士屋敷地域よりも地形的に低湿な地域に立地していたものと推定される。

町屋地区は外堀（番場川）外で、『因幡志』に、江戸時代の若桜は駅馬四疋が置かれた宿場町で、「鳥取ヨリ七里一町ナリ、一筋町ニテ下ノロヲ農人町、上ノロヲ新町ト云フ、是ヨリ分レ道アリテ直南へ通レハ、窟堂ニテ播作両州へ通ス、左東ハ豹ノ山道ニテ但馬へノ往還ナリ……町並民家ノ造リモ他ノ在郷ニハ事異テ奇麗ナリ、小路一筋ナントモ兩側ニ小川通りテ、兩側ノ水ヲ飲食ノ用トシ……殊ニ産物多ク諸職人アリテ種々ノ品ヲ仕出シテ國中ニ交易ス……〔41〕」と記している。城下町時代も、当然、播磨、美作、但馬への街道の要衝であり、宿場町的な機能を有していたものと推定される。町屋の中心は小字名「上町」、「中町」、「下町」で、これらの町は、幅員約二間半の城下町の幹線道路に沿っている。「上町」とか「下町」は城下町においては成立の比較的早い町といわれるが〔42〕、若桜においても、最初は上、中、下の三土居と西土居の四つの土居からなり、上下一本の町として發達した。土居とはこの地方では、集落の区画を意味し、江戸時代以降、それぞれ上町、中町、下町と称し、西土居は農人町と称するようになった〔43〕。従つて、城下町時代の町屋は「上町」、「中町」、「下町」だけで、職人町の町名は残存していない。また、小字名「農人町上分」、「農人町下分」は百姓屋敷を意味し、農民も惣構え内に内包されていたとも推定される。

一方、戦略的に重要な寺院配置についてみると、いずれも市街域外縁に配置され、小字名「鉄砲町」に静徳寺、「浦町」に寿覚院、西方寺、正栄寺、蓮教寺の四寺院があり、しかも、この「浦町」の四寺院は市街域を取り囲むように一線上に並び、かなり計画的に配置されていることが考察される。城下町を走る道路配置をみると、町屋地区を通る主要幹線路は幅員約二間半で一番広く、近世の城下町の道路形態と同じように、市街域入口で丁字路をなし、市

街内が見透せないようになっていた。この幹線路と並行するように侍町に二条の道路が走り、内側の道路が二間半位、外側の道路が一間半位の幅員である。これら三条の道路は「上町」と「下町」で相互の連絡路が作られているほかは、相互間の連絡路はみられず、道路配置にも防禦的配慮が考察される。また、江戸時代の「八東郡若桜宿田畑地続全図」により、町屋の屋敷を推定すれば、各屋敷とも間口が狭く、奥行が深い。最も狭いもので、間口一間半位、奥行十五間と二十間位、普通で間口二〜三間、奥行十五間と二十間位で、所謂、「ウナギノ寝床」と呼ばれているのである。

このような城下町若桜も元和三年、城主山崎家治が備中成羽に転封になると、家臣団のみならず、町屋の人の中にも成羽へ移住したのもあったものと推定される。そのため、侍屋敷地区を中心に荒廃したものと推定される。しかし、現在では侍屋敷地区のうち、高級武士団の屋敷地は小学校や中学校の校地として利用されている。町屋地区は江戸時代には播磨（姫路）への街道の宿場町として栄え、駄馬四疋も置かれ、新しく街道沿いの上町の上、小字名「新町」に新町が誕生した。江戸時代の寛政七年（一七九五）の『因幡志』の記録によると、当時の若桜宿は新町、上町、中町、下町、農人町で構成され、戸数三〇七戸となっている。その後、文久三年（一八六三）には戸数三三一戸となった。明治七年（一八七四）若桜宿大火により、市街地の大半が焼失し、城下町時代や、江戸時代の面影がみられなくなった。そして、明治十一年（一八七八）の戸数三六七戸（共武政表）となり、明治十八年上町、中町、下町を貫通していた道路を改修し国道とした。このため、下町の下、小字名「隅田」、「坂川」に新しく、西町、上町の上、小字名「猿岩下タ」に山田町が誕生した。このように、城下町から出発した若桜も、城下町以後、交通上の要衝に位置していたため、次第にその市街域を拡大していった。

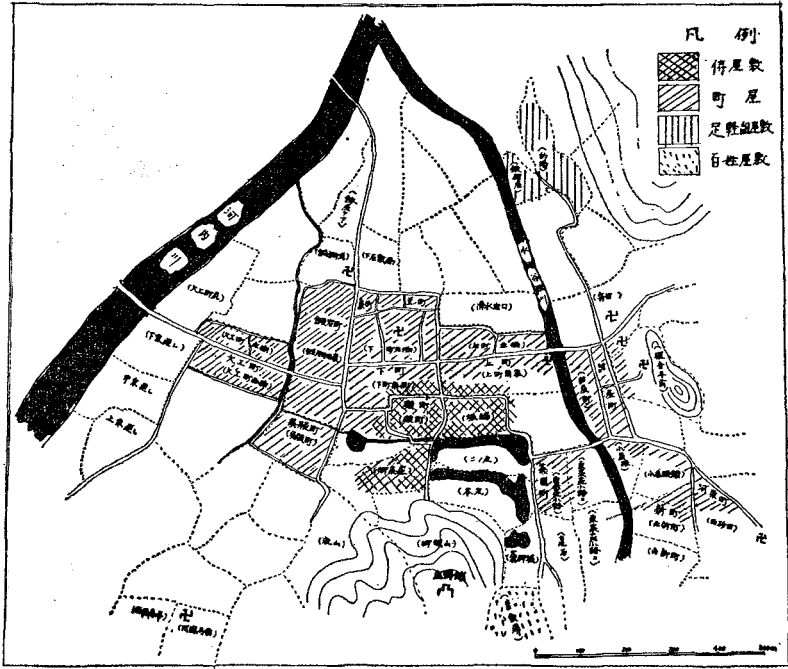
(4) 鹿野

志加奴氏代々の居城である鹿野城の草創時代は不詳である。志加奴氏の名は明德の乱（一三九一）のとき、山名氏の部將に志加奴某の名がみられる。また、天文十二年（一五四三）、出雲の尼子晴久、鹿野城を攻撃したとき、志加奴入道以下三百余人が討死したという⁽⁴⁴⁾。

永祿頃（一五五八～六九）、毛利の勢力が強大になるにつれて、山名源七郎、三吉三郎左衛門、進藤豊後守を経て、天正八年（一五八〇）秀吉の部將亀井新十郎が入城し、その後、気多郡一万三千石で鹿野城主に封ぜられ、関ヶ原戦後、高草郡を増増され、三万八千石となり、その子豊前守政矩の時、四万三千石に加増され、元和三年（一六一七）石州津和野に転封されるまで、父子在城、三十七年間であった。

鹿野城は王舎城とも号し、鹿野の背後、妙見山（約一六〇米）上にあり、『因幡志』によると「城は良ノ方ヲ前トシテ本丸、二ノ丸塀重内門、塀風櫓、内塀、外塀、薬研堀、皆二重石垣ニテ橋ノ迹マテ、依然ト残レリ、……城門北ヲ大手ト爲ス山ノ高サ百三十間城内東西十六間、南北八間……城山東西ハ田ナリ、南ハ山ナリ、北ハ鹿野町ナリ町ヨリ山下ニ到テ百七十間、城山周囲回七町十間、馬寄北云々⁽⁴⁵⁾とみられる。また、鹿野城は亀井茲矩の時、大改築された。即ち、本丸、二の丸、三の丸、西の丸を築き、内堀外に出丸を築き、外堀をめぐらしたともいわれる⁽⁴⁶⁾。現在でも、山麓に本丸、二の丸、内堀、外堀、薬研堀などの遺構がみられる。

城下町鹿野は妙見山山麓で、河内川、水谷川に挟まれ、両河川を惣構えとするかのように立地している。市街城の大部分は河内川の上位段丘面上に立地し、内堀、薬研堀、外堀などの濠の水や、城下町の飲料水、日常用水のほとんどは水谷川の水を引き利用している。侍屋敷地区は妙見山下の小字名「殿町」、「御茶苑」、「堀端」一帯と推定され



第7図 推定鹿野城下町図

る。侍屋敷地区と町屋地区の境界には濠などの人工境界物は存在せず、水谷川の旧河道と推定される自然境界物を利用していたものと考察され、外堀内の「御茶苑」は高級武士の居館があったとも伝承されている。また、市街域の北に小字名「鉄砲屋」、「的場」の地名がみられる、江戸時代の記録に「……青木ノ東、蘆ヶ谷ノ辺ニ、鉄砲屋ト号スル処アリ、其辺マタ的場ト呼地アリ、是豈昔時鳥銃練習ノ場ナル歟……」(74)とみられる。「鉄砲屋」、「的場」は、その地名より射撃練習場であるとともに、付近は足軽組屋敷地区にもなっていたものと推定される。これら侍屋敷地区は城主の津和野転封により荒廢し、現在では小学校、中学校の用地として利用されている。

町屋地区のうち城の大手、正面前に立地するのが「上町」、「下町」である。一般に、中心的

商業地区は常に城下を貫通する根幹道路沿いの城郭前面、即ち、大手付近に立地するといわれる⁽⁴⁸⁾ことより、これらの町は、城下町鹿野における商工業の中心地域をなしていたものと推定される。また、鹿野には、商工業者の職人が存在していたことが、残存の町名や、小字名で考察される。そのなかで、現在も残存している町名は鍛冶町、大工町、紺屋町で、このほか小字名にみられるものに、「呉服町」、「新町」などがある。更に、江戸時代の記録に「……按図籍、見存ノ坊名ノ外、旧十有一ヲ得タリ、日津山町、八日町、新町、魚町、茶町、河原町、スヤマ町、呉服町、ノボリ町本町、油魚町也……」⁽⁴⁹⁾とみられ、魚町、茶町、ノボリ町、油魚町、河原町なども存在していたものと推定される。このうち、茶町は小字名「茶園小路」付近、河原町は紺屋町から雲竜寺に至る道路の南側に、そして、魚町は小字名「下町北側」の北辺に立地していた伝承されている。また、これら町屋の配置は、中心商業地区の上町、下町を段丘面上の中央幹線路沿いに、職人町の大工町は幹線路に沿ってはいるが、段丘崖の傾斜地から沖積面上に立地している。同じく幹線路に面する紺屋町も水谷川より外に立地している。そして、鍛冶町も瑞穂谷への道路に面しているが、段丘末端より段丘崖の傾斜地に位置、魚町は魚類の臭気のためか、市街北辺に立地している。このほか、呉服町、茶町、河原町、新町などはいずれも市街周辺部に位置している。このように、近世城下町の町屋の配置にみられるように、地形的、交通的に優位な位置に中心商業地区が位置し、それを取りまいて職人町が位置している。このような町屋地区も、城主の津和野転封後は寂れたものと推定され、江戸時代には「今ノ大工町坂ヨリ已西ハ、亀井公石州ニ移テ後、人居漸々減シテ蕭条タル三両戸ヲ留メ、其他ハ悉ク禾黍ノ地トナル、八九十年來、人煙復タ漸ク繁ク、今ノ如ク街坊ヲ成ス……」⁽⁵⁰⁾との記録もみられる。また、新町は町全体で宝木村に移り、宝木新町を作った。従って、現在でも、大半が鹿野の妙光寺、幸盛寺が各家の檀那寺となっている。

一方、城下町の寺院配置についてみると、市街南の小字名「成徳寺前」に成徳寺（現在は実存しない）、河内川西方に亀井氏の菩提寺、讓伝寺、市街北辺の小字名「鍛冶町尻」に光輪寺（現在は「御茶苑」に在）、「下町北側」に幸盛寺、そして、市街東縁の「上町南裏」に三光寺、「寄田」に妙光寺、浄徳寺、「観音寺前」に観音寺、そのほか、雲竜寺と合計して九寺院がみられる。このうち、五寺院が市街東縁に集中している。このように多くの寺院が東縁に集中しているのは亀井氏時代の初期の所領は気多一郡だけで、鹿野は気多郡の東端に位置し、すぐ東の山嶺が所領境界をなし、城と国境との距離が近いから、防禦を固めるためとも推定される。

城下町の道路配置をみると、城下町特有の丁字路や、L字路が各地にみられる。町屋地区の道路の幅員は商業の中心地区である上町、下町の幹線道路は約二間半と広い。これに対し、同じ幹線路でも職人町の大工町付近は約二間位、また、侍屋敷地区の道路も一間〜一間半位いと狭く、多くの丁字路や遠見遮断が作られている。これら侍町の道路の狭さと多くの屈曲点は弓矢銃弾の射通しを不可能にし、軍馬の疾駆を困難にするなど防衛上の便のためとされている⁵⁾。このような、亀井氏が城時、広大な城下町の発展をみた鹿野も、江戸時代の寛政年間（一七八九〜一八〇〇）には上町、紺屋町、小屋人町、堅町、殿町、新町、下町、鍛冶町、山根町、大工町で戸数三百五十戸余となった。その後、明治十一年（一八七八）、戸数五百五十戸（共武政表）となった。しかし、鹿野は城下町時代には山陰道の交通の要衝の地であったと推定されるが、幕藩時代には新しい交通路が海岸沿いに設けられ、更に、明治時代になると、海岸沿いの交通路が国道となり、また、明治四十年の国鉄山陰線の開通は、いずれも海岸沿いの地域ばかりで、孤立化状態となり戸数、人口とも減少の一途をたどっている。

おわりに

中世城郭下の集落（城下町）は、当時の領主の領国内の政治的、軍事的中心の集落である。これら領主は生産地域を離れての支配は成立しない。即ち、中世の城郭の分布は当時の、生産地域の範囲を示しているとも云える。これら、城郭や、城郭下集落の立地は領主の領国内における生産地域や、交通上の要衝に立地するのが普通である。因幡国における城下町は関ヶ原戦ないしは大坂の陣後、急速に発達したものと推定される。また、領主の転封などによる、城下町以後においても、その町の発展、衰退は交通的要因の如何による大きい。

註および参考文献

- (1) 籠瀬 良明 中世の館と地形、「現代地理講座」自然と社会」所収、昭和三十二年
- (2) 小林健太郎 中世城館の歴史地理学的考察—戦国大名領国の地域構造研究への試み—人文地理一五の四
- (3) 安陪 恭庵 因幡志、寛政七年（一七九五）
- (4) 大類 伸 日本城郭全集11、一九六七年、人物往来社
- (5) 小泉 友賢 稲場民談記、寛保二年（一七四二）
- (6) 大西 正己 砂丘の生たち、大明堂、昭和三十六年 六〇～六二頁
- (7) 「稲場民談記」、「因幡志」によると、江戸時代には大谷付近、細川付近、湯山付近に湖沼が存在したことがみられる。
- (8) 『日本後記』大同三年（八〇八）六月の条「因幡国八上郡莫男駅、智頭郡道俣駅馬各二疋省……」
- (9) 拙稿 駅家を中心とした古代山陰道の歴史地理学的考察、人文地理二三の一 九五頁
- (10) 岩永 寛 鳥取県における条里地域の研究（一）鳥取大学学芸学部報告、一九五九年
- (11) 大日本古文書 家わけ十八、東大寺文書之二

- (12) 拙稿 前掲註(9) 一〇〇頁
- (13) 小林健太郎 前掲註(2) 四二～四四頁
- (14) 原田 伴彦 日本封建都市研究、東京大学出版会一九六九年 四二四頁
- (15) 藤岡謙二郎・矢守一彦 歴史地理、大明堂、昭和四十三年 七七頁
- (16) 山中 寿夫 鳥取県の歴史、山川出版、昭和四十五年 四二～五七頁
- (17) 徳永 職男 鳥取県郷土史概説、山陰教材社、一九五六年 四六頁
- (18) 山中 寿夫 前掲註(16) 五六～五七頁
- (19) 山中襄太郎 地名語源辞典「土居」の頃、校倉書房、昭和四三年 二四三頁
- (20) 山中 寿夫 前掲註(16) 六九～七〇頁
- (21) 徳永 職男 前掲註(17) 五八頁
- (22) 「続日本紀」文武天皇二年三月五日条、「国史大系」所収
- (23) 鳥取県岩美町 岩美町誌、昭和四十三年 五五一頁
- (24) 安陪 恭庵 前掲註(3) 二上山城の頃
- (25) 文政六年(一八一八) 鳥取藩により作成、県立鳥取図書館蔵
- (26) 安陪 恭庵 前掲註(3) 岩常の頃
- (27) 鳥取県岩美町 前掲註(23) 七九九頁
- (28) 小泉 友賢 前掲註(5)
- (29) 大類 伸 前掲註(4) 天神山城の頃 五六～五七頁
- (30) 安陪 恭庵 前掲註(3) 布勢の頃
- (31) 安陪 恭庵 前掲註(3) 布勢村の頃
- (32) 矢部家文書 鳥取県八束町富枝、矢部氏所蔵、村江正民「若桜鬼ヶ城」所収、昭和四十年 四～五頁
- (33) 小泉 友賢 前掲註(5)
- (34) 安陪 恭庵 前掲註(3) 若桜鬼ヶ城の頃

- (35) 村江 正民 若桜鬼ヶ城、昭和四十年 五〇〜五二頁
- (36) 藤岡謙二郎 城下町の地理的研究の課題、城下町研究ノート覚書、現代地理講座、河出書房 昭和三十一年 二二九〜二二九頁
- (37) 村江 正民 前掲註(35) 七七頁
- (38) 村江 正民 前掲註(35) 七八頁
- (39) 鳥取県若桜町役場蔵
- (40) この道路は江戸時代の「八東郡全国」(年代不詳)によつてみると、御茶川筋の道路より広く、明治初年まで残存していたといわれるが、現在は小学校などの敷地となり不詳である。
- (41) 安陪 恭庵 前掲註(3) 若桜宿の項
- (42) 小野 均 近世城下町の研究、至文堂、昭和三年 一三九頁
- (43) 村江 正民 前掲註(35) 八二〜八三頁
- (44) 樫柴 竹造 気高郡史考、横山書店、大正十二年 三一頁
- (45) 安陪 恭庵 前掲註(3) 鹿野城の項
- (46) 大類 伸 前掲註(4) 鹿野城の項 四七頁
- (47) 熊谷 道伸 拾遺鹿野故事談、鹿野町史資料二号所収、道伸は宝暦十三年(一七六三)に生れ、大阪で学び、郷里鹿野で私学を聞き、文北十三年(一八一六)に歿す。
- (48) 小野 均 前掲註(42) 一三七頁
- (49) 熊谷 道伸 前掲註(47)
- (50) 熊谷 道伸 前掲註(47)
- (51) 原田 伴彦 前掲註(14) 二五二頁